

強者の戦略

今回は京大系の現代文です。30〜40分くらいを目安にチャレンジしてください！

次の文章は坂口安吾「教祖の文学——小林秀雄論——」の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

思うに小林の文章は心眼を狂わせるに妙を得た文章だ。私は小林と碁を打つたことがあるが、彼は五目置いて（ほんとはもつと置く必要があるのだが、五ツ以上は恰好が悪いやと云って置かないのである）けつして喧嘩（けんぱ）ということをやらぬ。置碁の定石の御手本通りのやりかたで、地どり専門、横槍（よこやり）を通すような打方はまったくやらぬ。こつちの方がムリヤリいじめに行くのが気の毒なほど公式的そのものの碁を打つ。碁というものは文章以上に性格をいつわることができないもので、文学の小林は独断先生の如くだけでも、本当は公式的な正統派なんだと私はその時から思っていた。然し彼の文章の字面からくる迫真力というものは、やっぱり私の心眼を狂わせる力があつて、それは要するに、彼の文章を彼自身がそう思いこんでいるということ、そして本人が思いこむということがその文学をして実在せしめる根柢（こんてい）的な力だということを彼が信条とし、信条通りに会得したせいではないかと私は思う。

彼の昔の評論、志賀直哉論をはじめ他の作家論など、今読み返してみると、ずいぶんいい加減だと思われるものが多い。然し、あのころはあれで役割を果していた。彼が幼稚であつたよりも、我々が、日本が、幼稚であつたので、日本は小林の方法を学んで小林と一緒に育つて、近頃ではあべこべに先生の欠点が見つかるようになったけれども、実は小林の欠点に分るようになったのも小林の方法を学んだせいだということを、彼の果した文学上の偉大な役割を忘れてはならない。

「それは少しも遠い時代ではない。何故なら僕は殆どそれを信じているから。そして又、僕は、無理な諸観念の跳梁（ちょうりょう）しないそういう時代に、世阿弥（せあみ）が美というものをどういう風に考えたかを思い、其処（そこ）に何の疑わしいものがない事を確めた。「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬところを知るべし」美しい「花」がある。「花」の美しさという様なものはない。彼の「花」の観念の曖昧さに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされているに過ぎない」（当麻）

彼が世阿弥の方法だと言っているところがそっくり彼の方法なのであり、彼が世阿弥に就いて思いこんでいる態度が、つまり彼が自分の文学に就いて読者に要求している態度でもある。

僕がそれを信じているから、とくる。世阿弥の美についての考えに疑わしいものがないから、観念の曖昧自体が実在なんだ、という。美しい「花」がある。「花」の美しさというものはない。

私は然しこういう気の利いたような言い方は好きでない。本当は言葉の遊びじゃないか。私は中学生のとき漢文の試験に「日本に多きは人なり。日本に少きも亦人なり」という文章の解釈をだされて癩（癩）にさわつたことがあつたが、こんな気のきいたような軽口みたいなことを言つてムダな苦勞をさせなくつても、日本に人は多いが、本当の人物は少い、とハッキリ言えばいいじゃないか。こういう風に明確に表現する態度を尊重すべきであつて日本に人は多いが人は少い、なんて、駄洒落（だじゃれ）にすぎない表現法は抹殺するように心掛けることが大切だ。

美しい「花」がある。「花」の美しさというものはない、という表現は、人は多いが人は少いとは違つて、これはこれで意味に即してもいるのだけれども、然し小林に曖昧さを

強者の戦略

弄ぶ性癖があり、気のきいた表現に自ら思いこんで取り澄している態度が根柢にある。

彼が世阿弥について、いみじくも、美についての観念の曖昧さも世阿弥には疑わしいものがないのだから、と言っているのが、つまり全く彼の文学上の観念の曖昧さを彼自身それに就いて疑わしいものがないということを支えてきた這般の奥義を物語っている。全くこれは小林流の奥義なのである。

あげくの果てに、小林はちかごろ奥義を極めてしまったから、人生よりも一行のお筆先の方が真実なるものとなり、つまり武芸者も奥義に達してしまうともう剣などは握らなくなり、道のまんなか荒れ馬がながれていると別の道を廻まわつて君子危きに近よらず、これが武芸の奥義だという、悟道に達して、何々教の教祖の如きものとなる。小林秀雄も教祖になった。

然し剣術は本来ブンナグル練磨であり、相手にブンナグラレル先に相手をブンナグル術で、悟りをひらく道具ではなかった。けれども小林秀雄のところへ剣術を習いに行くと、剣術など勉強せずに、危きに近よらぬ工夫をしる、それが剣術だと教えてくれる。これが小林流という文学だ。

「生きている人間なんて仕方のない代物だな。何を考えているのやら、何を言いだすのやら、仕出かすのやら、自分の事にせよ、他人事にせよ、解わかつた例れいがあつたのか。鑑賞にも観察にも堪えない。其処に行くに死んでしまった人間というものは大したものだ。何故あはつきりとしつかりとしてくるんだらう。まさに人間の形をしているよ。してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな」（無常といふこと）とくる。

だから、歴史には死人だけしか現われてこない。だから退ツ引きならぬ人間の相しか現われぬし、動じない美しい形しか現われぬし、と仰有る。生きている人間を観察したり仮面をはいだり、罰が当るばかりだと仰有るのである。だから小林のところへ文学を習いに行くと人生だの文学などは雲隠れして、彼はすでに奥義をきわめ、やんごとなき教祖であり、悟道のこもった深遠な一句を与えてくれるというわけだ。

生きている人間などは何をやりだすやら解わかつたためしがなく鑑賞にも観察にも堪えない、という小林は、だから死人の国、歴史というものを信用し、「歴史の必然」などということを仰有る。

「歴史の必然」か。なるほど、歴史は必然であるか。

西行さいぎやうがなぜ出家したか、などいうことをいくら突きとめようたつて、謎は謎、そんなところから何も出てきやしない、実朝じつちゆうがなぜ船をつくつたか、そんなことはどうでもいい、右大臣であつたことも、將軍であつたことも、問題ではない、ただ詩人だけを見ればいいのだと仰有る。

だから坂口安吾という三文文士が女に惚ほれたり飲んだくれたり時には坊主になろうとしたり五年間思いつめて接吻せつぶんしたら慌あわててしまつて絶交状をしたためて失恋したり、近頃は又デカダンなどと益々ますますもつて何をやらかすか分りやしない。もとより鑑賞に堪えん。第一奴めが何をやりおつたにしたらとここで、そんなことは奴めの何物でもない。こう仰有るにきまつている。奴めが何物であるか、それは奴めの三文小説を読めば分る。教祖にかかつては三文文士の実相の如き手玉にとつてチョイと投げすてられ、惨又惨たるものだ。

ところが三文文士の方では、女に惚ほれたり飲んだくれたり、専らその方に心掛けがこもつていて、死後の名声の如き、てんで問題にしていけない。教祖の師匠筋に当っている、アンリペイル先生の余の文学は五十年後に理解せられるであろう、とんでもない、私は死後に愛読されたつてそれは実にただタヨリない話にすぎないですよ、死ねば私は終る。私と共にわが文学も終る。なぜなら私が終るですから。私はそれだけなんだ。

強者の戦略

生きてる奴は何をやりだすか分らんと仰有る。まったく分らないのだ。現在こうだから次にはこうやるだろうという必然の筋道は生きた人間にはない。死んだ人間だって生きてる時はそうだったのだ。人間に必然がない如く、歴史の必然などというものは、どこにもない。人間と歴史は同じものだ。ただ歴史はすでに終っており、歴史の中の人間はもはや何事を行うこともできないだけで、然し彼らがあらゆる可能性と偶然の中を縫っていたのは、彼らが人間であつた限り、まちがいはない。

歴史には死人だけしか現われてこない、だから退ツ引きならぬギリギリの人間の相を示し、不動の美しさをあらわす、などとは大嘘だ。死人の行跡が退ツ引きならぬギリギリなら、生きた人間のしでかすことも退ツ引きならぬギリギリなのだ。もし又生きた人間のしでかすことが退ツ引きならぬギリギリでなければ、死人の足跡も退ツ引きならぬギリギリではなかつたまでのこと、生死二者変りのあろう筈はない。

つまり教祖は独創家、創作家ではないのである。教祖は本質的に鑑定人だ。教祖がちかごろ骨董を愛すというのは無理がないので、すでに私がその碁に於いて看破した如く彼は天性の公式主義者であり、定石主義者であり、保守家であり、常識家であつて、死人はともかく死んでおり、もう足をすべらして墜落することがないから安心だが、生きた奴とくると、何をしでかすか分らず、教祖の如く何をしでかす魂胆がなくとも、(注)足をすべらしてプラットホームから落つこちる、どこに伏兵がひそんでいるか分らない。実にどうも生きるというものはヤツカイだ。

だから教祖の流儀には型、つまり公式とか約束というものが必要で、死んだ奴とか歴史はもう足をすべらすことがないので型の中で料理ができるけれども、生きてる奴はいつ約束を破るか見当がつかないので、こういう奴は鑑賞に堪えん。歴史の必然などという妖怪じみた調味料をあみだして、料理の腕をふるう。生きてる奴の料理はいやだ、あんなものは煮ても焼いてもダメ、鑑賞に堪えん。調味料がきかない。

あまり自分勝手だよ、教祖の料理は。おまけにケツタイで、類のないような味だけれども、然し料理の根本は保守的であり、型、公式、常識そのものなのだ。

生きてる人間というものは、(実は死んだ人間でも、だから、つまり)人間というものは、自分でも何をしでかすか分らない、自分とは何物だか、それもてんで知りやしない、人間はせつないものだ、然し、ともかく生きようとする、何とか手探りででも何かまじな物を探し縫りついで生きようという、せつばつまれば全く何をやらかすか、自分ながらたよりない。疑りもする、信じもする、信じようと思ひこもうとし、体当り、遁走、まったく悪戦苦闘である。こんなにして、なぜ生きるんだ。文学とか哲学とか宗教とか、諸々の思想というものがそこから生れて育ってきたのだ。それはすべて生きるためのものなのだ。生きることにはあらゆる矛盾があり、不可決、不可解、てんで先が知れないからの悪戦苦闘の武器だかオモチャだか、ともかくそこでフリ廻さずにいられなくなつた棒キレミたいなものの一つが文学だ。

人間は何をやりだすか分らんから、文学があるのじやないか。歴史の必然などという、人間の必然、そんなもので割り切れたり、鑑賞に堪えたりできるものなら、文学などの必要はないのだ。

だから小林はその魂の根本に於いて、文学とは完全に縁が切れている。そのくせ文学の奥義をあみだし、一宗の教祖となる、これ実に邪教である。

(注)足をすべらしてプラットホームから落つこちる——本文前の部分で、小林秀雄が実際に駅のプラット

ホームから落ちたことが述べられている。

強者の戦略

問一 傍線部A「小林流の奥義」とはどういうものか。わかりやすく説明せよ。

(4行)

問二 傍線部B「なるほど、歴史は必然であるか」とあるが、ここには筆者のどのような意図が表現されているか。わかりやすく説明せよ。

(4行)

問三 傍線部C「これ実に邪教である」とあるが、筆者がそのように主張するのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

(5行)

※1行は35字前後と考えよう。